

私の名前は流遠^{るとお}ヤミヒメ。ゾイエス学園高等部に通う三年生だ。故^{ゆえ}あって、この店で看板娘をやっている。

『看板娘』というのは呼称であって役職ではない。だが、どういった事をやっているのかと問われれば、一言で答える術^{すべ}を持たないのが我々の実情だ。だから、とりあえず『看板娘』と名乗っている。

具体的に我々の行っている事を挙げるとすれば……まあ、色々だ。我々の雇い主——賃金が支払われていないため厳密には異なるが——の手伝いとして、イベントに駆り出されたり、雑用をやらされたりしている。

平日は学校があり、何より無償なので、そこまで日常生活における比率は高くはないが、それでも少くない時間を看板娘として過^{すご}している。

これは、そんな雑用を任されたある日の出来事だ。

初戦

『^{まどろ}微睡みの午後』

看板娘の仕事の一つに店番がある。

我々の雇い主——通称『マイスター』が趣味で経営している喫茶店、名前は『局地戦・改』。なんでも、過去に大規模な改装を行ったらしく、『改』というのはそのいう意味らしい。喫茶店に付ける名前かと疑問に思うが、それはここでは問題ではない。現在、フロアに店員が私一人しかいないが、それすらも問題ではない。

今、問題にすべきは——店番をしている私が睡魔に襲われている事だ。

ただでさえ、午後のまったりとした時間帯は、何もしていないと微睡まどろんでしまう。加えて季節は春。窓からは麗うららかな陽射ひざし。店内には客もなく、特にする事もない。

この喫茶店ではマイスターが自費出版で出している小説が置かれており、自由に読めるようになっていたのだが——いかんせん、私は読書に向いていないため、余計に眠くなってしまふのは目に見えている。

私はレジに置かれた椅子から立ち上がり、軽く上体を伸ばし、肺に新鮮な空気を吸い込み、また席に着いた。

「……………」

駄目だ。眠い。

平日のこの時間帯は暇なのが常で、妹のタオエンとベアトリーチェは買い出しに行っている。恐らく二人とも、途中で買い食いでもしている事だろう。ジャンケンに負けた我が身が呪わしい。

どうするか。いっそ、突っ伏して寝てしまおうか。どうせ、この時間に客など来ないし、来れば気付くだろう。直じきに妹達も帰ってくるはずだ。

私はいよいよ働かなくなってきた頭で考える事をやめ、睡魔に全面降伏する事に決めた。

さすがに狭いレジのスペースでは無理なので、客用のテーブルに移動し、その一つに陣取る。ちょうどよく陽射しが当たり、心地良い。両腕を枕にし、頭を傾けて載せると、意識を刈り取られるのは一瞬だった……。



からんからん——という、来客を告げるカウベルの音が聞こえた気がした。

「……ツバキ、看板娘が白昼堂々、居眠りしていいのか？」

この声はアサトか。なにやら呆れたような口振りだ。

「まあ、この時間帯はほぼお客さんも来ませんから」

答えているのはツバキか。こちらは苦笑気味だ。

「それでも君は律儀りちぎにレジにいるのか？」

「仕事ではありませんが、任された以上は責任がありますから。きっとヤミヒメ

さんもお疲れなのでしょう」

「今日きょう日の学生が何に疲れるのかね」

「いつも疲れた顔をしているお兄さんが言っても、説得力がありませんよ」

「そりやそうだ」

「あの、今のは皮肉のつもりだったんですけど……」

二人の何やら楽しそうに話をしている声を聞いているうち、段々と意識がはっきりしてきた。

「落書きでもしてやろうか」

「お兄さん、子供みたいですね」

「ツバキはもうちよい、子供になっていいと思うぞ」

「子供ですよ、私？」

たしか私は店番をしていて、睡魔に襲われて、それから――

「……んう」

「ん？ 起きたか」

「おはようございます、ヤミヒメさん」

頭を上げて重い瞼まぶたを開くと、私の同居人である少年と、同じ看板娘である少女がこちらを見ていた。

「――っ!?! わ、私はどれくらい、その……居眠りを？」

「私が来たのは三十分ほど前です。お客さんは来ていませんので、安心してください」

私の問いに答えたのは少女の方だった。セミロングの黒髪を左でサイドポニーにした、可愛らしい容姿をしている。まだ小学五年生でありながら、口調も性格も大人びており、それでいて礼儀正しい。

名前は高千穂たかちほツバキという。

「もうしばらくして起きなかったら、お兄さんに目覚めのキスしてもらおうとこゝろでした」

礼儀正しいツバキの口から、何かとんでもない言葉が出た気がした。

「めざめのきす……キスっ!？」

自分でも変な声が出たのは自覚している。だがそれ以上に、『キス』という単語に動揺を隠せない。

「……ツバキ、そんな話はしてないぞ。ヤミヒメ、本気にするなよ」

面倒くさそうな表情を隠しもせず、私にそう言ったのは少年の方だ。男にしては長めの黒髪で、黙っていればそこそ美美形なはずなのに、その気怠い雰囲気^{けだる}がすべて台無しにしてしまっている——というのが、周囲の彼に対する満場一致の意見だ。

たちばな

橘 アサト。前述の通り、私の同居人であり、同級生でもある。

「そうか……」

アサトの言葉を聞き、安心した半面、少しだけ残念がつている自分がある。あのまま眠っていれば、アサトにキスをされたのではないかという期待——

「……………」

私は無意識に、唇に自分の指先を触れさせていた。

「どうした。まだ寝ぼけてるのか？」

「——なっ!？」

アサトが覗きこむようにして、私の状態を窺^{うかが}った。私は椅子に座っており、彼は立っているため、自然と見下ろされるような格好になり、妙に気圧^{けお}されてしまう。アサトにはそんなつもりはないのだろうが、この位置関係でじっと見つめられると、冷静な思考が出来なくなってくる。

「……あの、ヤミヒメさん。先ほどの冗談ですから」

ふいに、申し訳なさそうなツバキの声が私の耳に届いた。声の主を見れば、苦笑を浮かべ、しかし笑ってはいけな^{こら}いと堪えている——そんな表情だ。

「……………!？」

私はどうしていいか判らなくなり、思わず、再び両腕を枕にして顔を深く埋^{うず}めた。

恥ずかしい。

いっそ、まだ夢であればいいと思うが……皮肉にも今ので完全に目が覚めてしまった。

結局、この後も来客はなく、私は閉店まで二人に宥^{なだ}めすかされる羽目^{はめ}となった。遅れて来た妹二人は何事かときよんとしていたが、説明は一切しなかった。



説明などしたら恥の上塗りだ……。

Mission complete

あとがき

どうも、るとおあき流遠亜沙です。

『そーりよくせんっ！』の二本目をお届け致します。

前はプロログ的な位置付けの『第0話』だったので、今回から本来のフォーマットに戻ります。所謂、いわゆるヒロイン一人にスポットを当てていくやり方です。

今回はサイトの二周年記念イラストをポイズンさんから戴いたので、それを基にお話を考えました。横たわったヤミヒメから、まあ、寝起きだらうーと。本・来・の・ヤミヒメはもうちょっと凛々しいイメージなのですが、看板娘としての彼女はこんな感じですよ。ツンデレな上にちよろい、比較的スタンダードなヒロイン補正がしてあります。

それでは謝辞を。

まずはイラストをくださったポイズンさんに感謝をありがとうございます。タオエン、ベアトリーチェ、ヤミヒメと、ついに初期看板娘の三人を描いていただけました。どの娘も可愛らしいですが、アンニュイなヤミヒメも素敵です。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。次回が誰のお話になるかは未定ですが、『あのキャラで、こんなシチュエーションが読みたい』というリクエストも受け付けております。実現するかは確約出来ませんが、参考にしたのでアンケートなり、思いついたときにウェブ拍手なりでお伝えください。あなたのリクエストが看板娘（それ以外も）を育てます。

2016 / 4 / 23 流遠亜沙

アンケートに答える

『そーりよくせんっ！』ページに戻る

『AQUA PALACE』へ行く（イラストを描いてくださったポイズンさんのブログ）